

日本がん疫学研究会

故日山與彦君追悼の記

田島和雄（愛知県がんセンター疫学部）

I 友人としての思い出

平成7年1月17日（火）午前5時46分、大地の揺れが早朝の眠気を覚まさせた。ふと、東海大地震でも始まるのかなと思ったのは間違いで、まさかの兵庫県南部地震であった。神戸市と淡路島北部中心に震度6（一部の地域では震度7）の烈震が襲った。テレビやラジオで災害に関する報道が時々刻々と告げられていく中で人々は兵庫県南部地震の災禍の大きさを認知した。そして、神戸市東灘区の被害が最も激しいことを知ったとき、ある一抹の不安が私の頭をよぎった。親戚、知人のことも心配になり何回か電話をかけてみるが繋がらない。その後、関西方面から電話がかかってくるようになり、心配していた現場の情報がある程度把握できるようになった。それでも、連絡が全くつかない友人の一人のことが終始頭を離れない。その人は大学の同窓でもあり、長年のがん疫学研究の仲間でもあった日山與彦君である。彼の住居は東灘区本中山町である。彼は二日後にせまっていた平成7年度日本癌学会シンポジウム「がんの民族疫学」の第一セッションの三人目の演者で、「移民のがん疫学」について紹介して下さることになっていた。シンポジウムへの参加はまず不可能と思ったが、それでも消息を知りたかった。

翌18日の午後3時頃、何回か試みた大阪府成人病センターへの電話がやっと彼の研究室に繋がった。「日山先生に大至急連絡を取りたいのですが?」、重苦しそうな女性の声で「日山先生の家は今度の地震で倒壊し、一階で眠っておられた先生は押しつぶされて亡くなられました!」、「まさか、情報は確かですか?」、「津熊先生が検死されましたので間違いはないと思います」、咄嗟には彼女の言葉を信じていることができなかったが、すぐに「大変なことが起こってしまった」と認識し、一瞬目の前が暗くなった。住居場所から家の部分倒壊は覚悟していたが、まさかそまでの事態は私の予想をはるかに越えていた。自分の研究室で一人になった途端、涙が吹き出して止まらない。人の死に涙したのは卒後初めて受け持った4歳の坊やの棺を送り出したとき以外に記憶がない。米国留学中に訪ねたニューヨークの彼の家庭、近くの広場で二人の息子さんとサッカーをした光景、今は倒壊してしまった彼の家でがんの疫学研究の将来について相談したこと、活発な眼科医でもある奥さんが興味深くわれわれの会話に耳を傾けておられたこと、私のがつぎと脳裡を駆け巡る。隣に寝ておられた奥様や二階のご子息二人は無事だった。家具・家屋の倒壊による瞬時の圧死。皮肉なことに国際共同研究のため韓国へ出張し、その帰国早朝の出来事だった。あと一日でも韓国でゆっくりしてくれていたなら、と時のいたづらに恨み言をつぶやく。一時間後には大阪大学医学部病態病理学の青笹克之教授が電話を下された。「同窓会を介して日山先生ご逝去の情報が入りましたから念のためお知らせします。今年度から大学院の客員教授をお願いしたばかりで誠に惜しい人を失いました。田島先生も気を落とされたでしょうね」

事実から逃れる術はない。昨日の午後、彼の母上と奥様

の故郷でもある姫路市の慶雲寺に親族、大阪府成人病センターの職員、日山君の同窓生、がん疫学研究会の会員、などが集まり氷雨の中で葬儀は終わった。天災を恨んでも詮方ないが、大切な友人であり、研究仲間でもある日山君を基盤にした阪神大震災が恨めしい。日山君は大阪地方を基盤にした研究を勢力的に展開され、特に肝炎ウイルスと肝臓がんに関する疫学的研究は国の内外から高い評価をうけておられた。共同研究者の津熊秀明先生が第1回目の日本疫学会奨励賞を授与されることに決まり、わが事のように喜んでおられた。日山君が国内の学会のみならず、国際会議にも招待され、「日本の肝臓がんの疫学研究」と題して、何回か講演されたのを聞いた。また、彼は国際共同研究を展開しながら海外の疫学研究者とも研究交流を図り、指導者として若い疫学研究者の育成に貢献されていた。さらに、内科学や病理学の研修経験を活かしながら、十年前から他分野の研究者達との情報交換、疫学的視野からの助言、学際的共同研究の推進、などにも大いに貢献された。最近では藤本伊三郎先生を先駆者とする大阪府の地域がん登録の推進事業に対しても疫学研究面から積極的に参画し、日本のがん疫学研究者としてその中核を担うべき立場に立たれていた。これらの研究実績については大阪府成人病センター調査部や大阪大学医学部同窓会などの遺稿集で詳細に紹介されるであろう。

日山君は灘高校から大阪大学医学部に入学、昭和47年に卒業され、四年間は内科医として研修、さらに二年間、基礎医学的知識の充実化を図るため第二病理学講座（現病態病理学講座）で臨床病理学を研修された。その後、疫学研究に興味を持ち大阪府成人病センターの調査部に就職された。同センターでは藤本先生や大島明先生の影響もあって、がんの疫学研究が中心課題となった。昭和59年には米国健康財団の研究所で、国際的にも有名ながんの疫学者アーネスト・ウインダー先生のもとでがんの疫学研究の技術研鑽に務められた。私と異なり、彼の英会話力は学生時代から高く、米国に2年間滞在している間にさらに磨きがかけられた。その後の研究軌跡については今更申し上げる必要はないであろう。彼は紳士的で性格も極めて温厚なため多くの研究仲間によく好かれており、エクボの浮かぶ笑顔は印象的で憎めない。また、研究姿勢は着実型で他分野の研究者からの信用も厚かった。彼には折に触れ研究に関して相談を持ちかけたり、彼からもいろいろと相談を受けたりしていた。私にとって、日山君はよきライバルであり、かけがえない研究仲間であった。

疫学研究は、真っ向から病氣と闘っている臨床医学とは異なり、生ける人間を相手に疾病予防を指向した要因探索のための気の長い研究を展開している。人間の生き様を理解していくために重要となるソフトな右脳の発想の展開（研究対象集団における文化形成動力の分析）、しかもファジー的世界における科学的情報の構築（統計学的解析）、さらにハードな基礎研究を取り入れた左右脳のバランス感覚を保った研究、突き詰めていけばいくほど厚みのある極めて困難な研究領域が「がんの疫学」でもある。私がそのような複雑な迷路で苦しんでいるとき、日山君は同期の研究仲間として、いつも心の支えとなるような助言を与

えて下さった。もちろん、私のみならず大阪地方を始めとする日本の若い疫学研究者の方々は日山君から何らかの有益なメッセージを頂いたものと思う。この事故により日山君は「最も重要なメッセージ」を私たちに投げかけて下さったように思えてならない。今朝方の夢の中で、あの笑顔の日山君が大空から「お前はもっと苦勞せよ」、と私に語りかけてくれたのである。

II 日本癌学会シンポジウムの記

日山與彦君を死に追いやった阪神大震災により、平成7年度日本癌学会シンポジウム「がんの民族疫学」の第一セッションにおける目玉課題でもあった「移民のがん研究」の講演取り消しを余儀なくされてしまった。しかし、全国から集まって下さる演者や参加者のためにも、日山君の講演部分を何とか補いたいと思ひ、文部省科学研究費国際学術研究がん特別調査の総括班長（現班長は富永祐民先生、重要な国際会議出席のため海外出張中で不在）を勤めて来られた愛知県がんセンター名誉総長の青木國雄先生に、開催前々日の夜8時頃、失礼を承知の上で電話にて相談してみた。青木先生ご自身も大変興味を持っておられる課題ではあったが、夜間のあまりにも急な話のため、「前向きに考えてはみるが返事は一晩待つてほしい」、と言われて電話を切られた。

翌前日の朝、大阪の藤本先生から電話があった。「日山君が本シンポジウムで用いるスライドをワンセット準備して彼の机の上に置いてあるのを見つけた。極めてわかりやすい記述的なスライドだから、説明はほとんど不要と思う。今日の夕方までには誰かに届けさせるから、このシンポジウムを楽しみにしていた彼への供養と思って君が代わりに紹介してもらえないだろうか。」とのことであった。恐らく、国際共同研究のため韓国へ旅立たれる前に彼自身が作成したものと思われる。勿論、藤本発言に対して異論のあろうはずがない。私が紹介するしないは別にして、さっそく、そのことを青木先生に相談した。青木先生は、即座に「わかりました。その役目は私が引き受けましょう。」、と言って下さった。果たして午後4時頃、成人病センター調査部の電算機専門技師の木綿さんが彼のスライドを届けて下さった。狂気的が多忙となってきた今頃、彼はいつこのように美しいカラースライドを作成する能力を身につけたのだろうか。

今回の阪神大震災により新幹線などの公共交通機関も乱れ、特に神戸市を中心とした地域の交通麻痺により、陸路による神戸以西からのシンポジウム参加は不可能となった。また、全国的に陸路も空路も通常ダイヤが乱れ、遠方からの参加は極めて困難になった。午前8時50分に開始予定であったが、このような事情に鑑み、十分間後らせて9時から開始した。京都大学井村裕夫総長の日本癌学会会長挨拶に先立ち、日山君の逝去を悼みながら参加者全員で黙祷を捧げた。井村会長からも丁寧なお悔やみの言葉をいただいた。シンポジウムは4つのセッションからなっていた。第一セッションでは、主にがんの疫学的研究を紹介することになっており、民族疫学の基本概念、記述疫学から見た日本・世界におけるがんの分布特性、移民のがん研究からながめたがんの民族特性、分析疫学による消化管がんの要因と民族特性、などが紹介された。青木先生は日山君の作成されたスライドにそって、彼の話そうとしていたであろう内容をすべて網羅しながら、丁寧に紹介された。すでに黄泉路に旅立たれた日山君も青木先生のご発表に満足されたことと思う。第二セッションは、民族学、人類学、生態学からみた疫学研究について紹介された。第三セッションでは、MHC遺伝子、HTLV遺伝子、ミトコンドリア遺伝子からみた民族の分布特性について

紹介があった。第四セッションでは、HCVウイルス関連がんの発病機序、遺伝性がんの病因特性、P53変異からみた疾病感受性、などの紹介があった。総合討論では、菅野先生から、本シンポジウムの意義、および新しい研究パラダイムを進展させていくための問題点についてご指摘があり、それについて討論が行われた。

このような惨事のあとにもかかわらず、シンポジウムの参加者は120人を越え、なんとか成功裡に終了させることができた。本シンポジウムが日山君の追悼シンポジウムになることは、全参加者の誰の頭にも思い及ばなかったことであろう。予知できない天災の脅威と人命の儚さ、大自然に対する文明力の脆弱さ、われわれは日山君の追悼シンポジウム「がんの民族疫学」から、いろいろなことを考えさせられた。

茲に「故日山與彦君追悼の記」として、日本がんと疫学研究の諸先生方に慎んでご報告申し上げます。

(平成7年1月23日)

第1回家族性腫瘍研究会学術集会のご案内

目的：大腸癌研究会内の研究プロジェクトとして遺伝性大腸癌研究会を過去5回開催してまいりましたが、このたび、その他の臓器腫瘍を含めることの必要性が強く認識されて、「家族性腫瘍研究会」として新たに発足することになりました。家族性腫瘍は高頻度に見られるものではありませんが、近時、その研究は発癌の分子生物学的プロセスの解明とがん予防対策の両面において極めて有効な手段として注目されつつあります。その際、種々の臓器腫瘍の家族内集積または遺伝性症候群を伴う癌などの実地診療上の貴重な経験をもつ臨床家の方々と遺伝学、疫学、分子生物学、病理形態学などの領域との密接な協力により幅広い研究を促進することが本会の目的であります。

会期：平成7年6月9日（金）

会場：郡山ビューホテルアネックス
〒963 郡山市中町10-10
電話 (0249) 39-1111

プログラム内容：癌の家族内集積および遺伝性腫瘍に関する基礎的・臨床的研究および症例報告

特別講演1 癌の遺伝外来

特別講演2 乳癌の遺伝子 BRCA-1

教育講演 癌の家族内集積に関する基礎的遺伝学

演題申込：平成7年3月31日締切

世話人：星総合病院外科 野水 整
福島県立医科大学第二外科 土屋敦雄

連絡先：星総合病院外科
〒963 郡山市大町2-1-16
電話 (0249) 23-3711
FAX (0249) 39-3141

家族性腫瘍研究会代表 兵庫医科大学第二外科 宇都宮讓二

東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西

東西編集後記

日山先生の突然の訃報に接し、本号は田島先生による追悼記の特別号としました。多くの先生方に追悼文をお寄せいただいで特集号を企画することも考えましたが、田島先生とも相談し、とにかく緊急に発行することに意義があると判断し、この様に致しました。このニューズレターの新編集委員として「東西コンビ」を組ませていただき、最近特に交流を深めさせていただいていた矢先の出来事に、私としては言葉もありません。

ただ、ただ御冥福をお祈りするばかりです。（深尾）

発行

日本がんと疫学研究学会

事務局 〒464 名古屋市千種区鹿子殿1-1
愛知県がんセンター研究所疫学部 気付
TEL: 052-762-6111 FAX: 052-763-5233
振込口座 名古屋1-37001

編集責任者

深尾 彰